依　　頼

フィリピンに英語留学する日本人の言語態度に関する一考察

羽井佐　昭　彦

Ⅰ　はじめに

近年，フィリピン英語留学が脚光を浴びている．フィリピン政府観光省の推計（2014）によるとフィリピンに英語留学をする日本人の数は，2010 年におよそ 4,000 人であったが，2013 年には約 26,000 人と 6 倍以上の増加を示した．日本人の海外への留学生総数が下降の一途をたどるなか，なぜフィリピン英語留学がここまで人気を博しているのだろうか．その最も大きな理由の 1 つは，欧米への語学留学に比べ，留学費用の安さがある．例えば欧米での 1 ヶ月の語学留学費用が 50 ～ 60 万円であるのに対し，フィリピン英語留学では 20 ～ 30 万円とおよそ半額か 3 分の 1 程度の費用で済む．また大学を卒業したフィリピン人講師の高度な英語力に加え，人件費の安さによって生み出されたマンツーマン教育もフィリピン英語留学の大きな魅力として留学生を惹きつけている 1 つの特徴である．

このように最近ブームになりつつあるフィリピン英語留学であるが，この留学がアメリカ，イギリス，カナダといった英語母語話者圏への留学と根本的に異なる点がある．それは，日本人留学生が英語母語話者（Native Speaker of English: NSE）ではなく，英語非母語話者（Nonnative Speaker of English: NNSE）であるフィリピン人から英語を学ぶという点である．近年，Kachuru（1996）の図に示される，outer circle や expanding circle での英語使用者，すなわち NNSE の数がむしろ NSE の数より大きくなっており，NNSE 間での英語使用の重要性が指摘されるようになってきた．フィリピン英語留学では，フィリピン人講師と学習者間という限られたコンテクストではあるが，まさに共通語としての英語（English as a Lingua Franca: ELF）を媒介として，NNSE 間でのインタラクションが起こっていることになる．フィリピン英語留学は，このように日本語を母語としない NNSE による英語教育という新たな状況を生み出し，これまでの日本人英語学習者を対象とした ELF 研究では未開拓の分野として位置づけることができよう．その第一歩として，フィリピンでの英語教育を通して日本人留学生の言語態度がどのように変容するのかは興味深いテーマであり，研究する価値のあるものだと考えた．

そこで本研究では，目的を以下の 3 点に絞った．1．フィリピン英語留学前・留学中・留学後で日本人留学生がどのような言語態度を持っているか，2．フィリピン英語留学を通して言語態度に変容は起こるのか，3．言語態度変容における心理的メカニズムはどのようなものなのか，という 3 点である．

Ⅱ　フィリピン英語留学とは

フィリピンへの留学生の言語態度を考察するうえで，フィリピン英語留学がどのようなものか知っておくことは重要だと思われるので，ここでその概要を紹介する．フィリピン英語留学は，もともとは韓国人がフィリピン人の英語力と安価な人件費に着目し，韓国人の英語力向上のために 1990 年代中頃に始めたビジネスモデルである．韓国人留学生の需要は着実に伸び，現在ではフィリピン国内に大小合わせて 500 校以上の英語学校があると言われている．韓国人留学生のマーケットはもはや飽和状態にあり，今は日本人留学生が新たなマーケットとして需要を伸ばしているのが現状である（渡辺・羽井佐，2014）．

英語学校はほとんどが全寮制のシステムを取り，留学生は１～４人部屋のどれかを選んで生活する．食事や洗濯，部屋の掃除なども費用に含まれており，留学生は英語学習のみに集中できる環境が整っている．留学生は多くの場合，日曜に到着し，月曜にオリエンテーションとレベルチェックのテストを受け，火曜から授業に入る．留学期間はまちまちで，１週間だけの短い留学から６ヶ月～１年と長期にわたる留学生もいる．授業は小さな個室でフィリピン人講師と留学生が１対１で授業を受けるマンツーマン教育が主体であり，１日の総授業時数６～８時間のうち４～６時間をマンツーマン教育が占め，２～４時間がグループレッスンとなる．

Ⅲ　先行研究

これまでの多くの研究において，日本人英語学習者が NSE の英語をターゲットモデルとしているという傾向が指摘されてきた．例えば，Matsuura *et al.*（1994），Chiba *et al.*（1995）といった，頻繁に引用される早期の研究から現代にいたるまで，日本人英語学習者が NSE の英語，特にアメリカ英語やイギリス英語を規範とするという調査結果を報告した研究は多い．Matsuda（2003）は，日本人の高校生が英語を国際語として認識しつつも，一方で英語が NSE，特にアメリカ人とイギリス人のものとして捉えているとし，英語の国際化にもかかわらず，英語母語話者主義が根強く残っていることを指摘した．またその傾向は，Matsuda（2002），Yamanaka（2006），Takagaki（2008）の研究において，日本の検定教科書の英語が主にアメリカ英語またはイギリス英語を規範としていることによる影響が大きいのではないかとの指摘がなされている．

Kobayashi（2008）は，本研究の試みと同様に，フィリピンに留学した台湾人の大学生を対象に言語態度変容について探求した．その結果，フィリピンでの英語変種との接触を経た後でも，台湾人大学生が NSE の英語を唯一のターゲットモデルとする態度に変化が見られなかったことがわかった．一方，Hanamoto（2013）の研究においては，NSE の英語変種のみにさらされた参加者が NSE の英語を高く評価し，NSE と NNSE の両方の変種にさらされた参加者は NNSE の話す英語に好意的な態度を示す傾

向のあることを検証している．この研究は「フィリピン人講師によって話される英語変種に触れることによって日本人英語学習者の英語変種に対する寛容性が増す」という可能性を示唆するものである．

Ⅳ　フィリピン英語留学に参加した日本人を対象とする調査

1　調査の目的

日本人英語学習者が NSE の英語をターゲットモデルとしていることは多くの先行研究が指摘してきたことである. もしこの言語態度が英語でのコミュニケーションを阻害する要因になっているとしたら，それは大きな問題である．具体的には，NSE のように話さないと格好悪いといった強迫観念が無意識のレベルで存在するとしたら，それは日本人が英語を話す際のハードルを高め，発話抑制につながる可能性を秘めている．本研究では，その可能性も視野に入れ，NNSE であるフィリピン人講師の英語に触れることで，英語を NSE のものとして捉える態度から，英語をコミュニケーションツールとして捉え，様々な話者間で通じる英語を指向する態度へと変容していくのかどうか，また変容するとしたらどのように変容するのかについて，留学前・中・後のインタビューを通して明らかにしたい．

2　調査方法

方法は，留学前のアンケート調査（筆記，付録を参照），留学前・留学中・留学後のインタビュー調査である．インタビューはグループインタビューの形式を取るケースが多かったが，グループでのインタビューが難しい場合は，個別のインタビューを行った．留学前インタビューでは５つの質問（①留学先としてなぜフィリピンを選んだか，②フィリピン英語留学に対する印象，③フィリピンの英語に対する印象，④英語学校を選んだ基準，⑤フィリピン英語留学に何を期待するか）に焦点を当てて実施した（詳細は Haisa & Watanabe，2014 を参照）．留学中・後については，４つの項目（①実際の英語学校の様子と満足度，②フィリピン人の英語，③授業外での交流，④今後の英語学習）の観点から留学前の考えと現実の経験を比較して語ってもらうことを中心に進めた．本研究では，この研究分野が未開拓であることから質的アプローチを試み，インタビューでは柱となる質問項目は立てたが，参加者にはできるだけ自由に話してもらい，インタビューの流れのなかで出現する内容を重視した．インタビューデータは転記し，転記データを基に考察した．

3　調査対象者

調査対象者は 2013 年７月６日に東京・渋谷で行われたイベント「太田英基氏の講演会」への参加者に対し, 本研究の主旨を説明し，協力してもらえる参加者を募った．その結果, 計８名の調査対象者（以下，研究参加者或いは参加者と表記）が集まった．表１が研究参加者のリストである．

本研究では，前述したように講演会に集まった人たちのなかからランダムに声をかけ，最終的に承諾を得た８名だったため，年齢，性別，身分，英語力などの面で様々な参加者が対象となった．また留学

前は全員に対してアンケートとインタビューを行うことができたが，留学先，留学時期，留学期間がそれぞれの参加者で様々だったため，最終的に留学前・中・後の３回のインタビューが可能となった参加者は２名のみであった．また留学前・中の２回のインタビューができた参加者が２名，留学前・後の２回のインタビューができた参加者が３名，そして残念ながら１名の参加者は留学中も留学後もインタビュー日程の調整がつかず，留学前のインタビューのみとなってしまった．したがって本稿では，留学中と留学後のインタビューはまとめて扱うこととした．表１にインタビューの実施日が記載されているが，実施日が複数で同じ場合はその参加者たちがグループインタビューの対象者であり，それ以外が単独インタビューの形式を取った参加者である．

表１　本研究参加者に関する情報

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
性別	男	男	男	女	男	女	女	男
年齢	24	22	40	21	21	26	25	31
身分	大学生 理系 大学院	大学生 文系 休学	社会人 IT 関係 →求職中	大学生 文系	大学生 文系	社会人 退職→豪州 ワーホリ	社会人 退職→豪州 ワーホリ	社会人 IT 関係 休職
留学場所	セブ	セブ	バコロド	ターラック	マニラ	セブ	セブ	バギオ イロイロ クラーク
留学時期 留学期間	８月中旬～ １ヶ月	９月下旬～ ４ヶ月	８月上旬～ ２ヶ月	９月下旬～ ２ヶ月	９月下旬～ ３週間	９月下旬～ ２ヶ月	９月下旬～ ５か月	11 月上旬～ ６ヶ月
留学前 IV	2013/７/10	2013/７/10	2013/７/10	2013/７/23	2013/７/23	2013/８/14	2013/８/14	2013/８/２
留学中 IV	–	2013/10/25	2013/９/11	–	–	2013/10/25	2013/10/25	–
留学後 IV	2013/12/11	2014/３/20	2013/12/11	–	2014/３/20	–	–	2014/６/６

IV= インタビュー，ワーホリ = ワーキングホリデー，留学開始年：2013 年

Ⅴ　結果

前述したように，本研究では質的研究を試み，留学前のインタビューでは，フィリピン英語留学を考えている参加者が英語に対してどのような言語態度を持っているかという全体的な特徴をつかむことを目的とした．したがって大まかな質問は決めておいたが，話の流れを重視することにより参加者の言語態度が浮き彫りとなるよう試みた．その結果，参加者たちの言語態度の大きな特徴として，次の４点が浮かびあがってきた．それは，１．英語の特にスピーキング能力向上に対する強い動機づけ，２．NSE の英語をターゲットとして指向する態度，３．フィリピン人講師の英語に対する寛容性，４．フィリピン人講師の英語に対する好意的態度，である．

1　英語スピーキング能力向上に対する強い動機づけ

英語留学を考える日本人はフィリピンに限らず，どこに留学するにしても英語スピーキング能力向上に対する強い期待感を持っていることは当然予想される．特にフィリピン英語留学では前述したように長時間にわたるマンツーマン教育が特徴であり，そこでは必然的に生徒の長い発話時間を確保することが可能となり，グループレッスンを主体とする欧米への留学生以上にスピーキング能力向上に期待するところが大きいのではないかと推測される．しかし，欧米での留学においても英語を使用する機会は日本に滞在している時と比べて圧倒的に多くなるため，ここでは特にフィリピンだからということではなく，１つの事例としてフィリピン英語留学に参加した日本人のケースを紹介することとする．

表２は，アンケート及びインタビューを通して英語スピーキング能力を向上させたいという強い動機づけについて言及した参加者である．特に留学前には，当然のことながら誰もが強い意欲を示した．特に参加者“A”,“B”,“C”は就職活動,“F”,“G”はオーストラリアでのワーキングホリデー,“E”は世界一周旅行のための英語スピーキング能力向上といった具体的な必要性からフィリピン英語留学に参加するという傾向が見られた．また“E”を除いて，どの参加者も留学中・留学後も高い動機づけを維持した．参加者“E”はフィリピンでの留学期間が３週間と短く，英語学校の授業に効果が見出せず，留学後のインタビューにおいて強い動機づけを維持したとするコメントは得られなかった．“E”も留学中にスピーキング能力を向上させたいという意識はあったと推測するが，強い動機づけについての明示的なコメントがなかったことから表示は「×」ではなく「－」とした（以下，同様）．

表２　英語スピーキング能力向上に対する強い動機づけ

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学前	○	○	○	○	○	○	○	○
留学中・後	○	○	○	NA	－	○	○	○

表３は「授業外での英語使用の欲求」を示したものであり，これは留学中の英語スピーキング能力向上に対する強い動機づけの維持を裏付けるものである．“E”と“G”を除いた５名の参加者が授業外で英語を使いたいという強い欲求について言及していた．その多くが日本人とつるんでしまうことによる英語使用時間の減少に対する不満であった．参加者“E”と“G”が日本語使用に対する不満を述べなかったのは,二人が日本人経営の英語学校に通っており,韓国人を始めとする他国の留学生がいなかったことが理由として考えられる．また“G”は，授業後に英語だけではわからなかったことが日本語で聞けるといった点など，日本人と一緒であることのメリットについて言及していた．

表３　授業外での英語使用の欲求度大の参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	○	○	○	NA	－	○	－	○

以下は，授業外での英語使用の欲求についての言及の引用である．

“B”「普段は，日本人と一緒にいるのも嫌なので，韓国人とばかりいます．」
“C”「予想とほとんど違ったというのは，ほとんど日本人がいないのかと思ったら，実際には結構いて，ルームメイトも半数日本人だったんで，どうしても日本語で話しちゃうんですよ．」
“F”「結構日本語に触れてる時間が…．英語を使う時間を作らないと難しいっていうのは最近本当に感じる．…日本人が少ないって聞くと羨ましいなって思います．」

海外留学で日本人が集まってしまい，日本語ばかり話してしまうというのは，どの留学プログラムでもつきものの悩みのようである．ここで着目したいのは，フィリピン英語留学において他国の留学生というと圧倒的に韓国人が多く，参加者はフィリピン人講師とのインタラクション以外にも韓国人との交流という ELF 環境に身を置くということである．本稿では，韓国人留学生との英語接触が日本人留学生の言語態度に与える影響は扱わなかったが，その経験によって英語に対する意識がどう変化するのかは興味深く，今後の研究課題としたいところである．

英語スピーキング能力向上に対する強い動機づけは，英語力向上の伸び幅に対するフィリピン英語留学の満足度という点で意外な結果をもたらした．表４はその満足度を示したものであるが，驚いたことに留学後のインタビューが実施できた参加者５名のうち４名が不満足であることを示唆していた．　インタビュー内容から，参加者は留学前の英語の伸びに対する期待値が高かったがゆえに，そこには届かなかったという意識が不満足感につながったようである．“E”以外のどの参加者も，英語学校のプログラムやシステム，フィリピンでの生活には大変満足しており，短期間で簡単に英語力が伸びることはないことを改めて知ったとの言及がなされていた．

表４　英語力向上の伸び幅に対する満足度

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	×	×	×	NA	×	NA	NA	○

以下は英語力向上に対する満足度についての言及である．

“A”「僕，すごく場の空気に流されやすいので…日本語で話しちゃうんですけど，もしかしたら日本人があまりいない時期に行ってたら，もっとしゃべれるようになってたのかなと．」
“B”「伸びに関しての満足度は低いですけど，フィリピンでやれることはやったと思うので，それに関しては満足してます．」

この言及のように，“A”も“B”も伸び率に対する主観的な満足度は低いのであるが，客観的には

英語力がかなり伸びているというのも事実のようである．例えば“A”は，所属する英語学校で実施された，留学開始時と留学終了時のスピーチ録画を提供してくれたが，二人の調査者が視聴したところ，“A”のスピーキング能力がかなり向上していることが観察された．また“B”も「伸びに関しての満足度は低い」と言及していたにもかかわらず，実際は TOEIC テストにおいて留学開始時の 570 点が留学終了時には 760 点まで伸び，特に元々半分以下だったリスニング部門が 7 割くらい取れるようになったとのことであった．このことからも参加者たちのフィリピン留学に対する留学前の期待度，特に英語スピーキング能力向上に対する期待度がいかに高いものであったかがわかる．

2　NSE の英語をターゲットとして指向する態度

本研究ではフィリピン人の英語に対する態度に焦点を当てたため，聞き取り調査ではどの英語をターゲットモデルとするかという点については，全ての参加者への質問項目として含めなかった．しかし，この項目は言語態度の変容を調査するうえで重要であると判断したため，インタビューデータからわかることについて明示的・暗示的両側面から可能な限り抽出を試みた．

表 5 は，NSE の英語をモデルとして指向していることを明示的或いは暗示的に示唆した参加者である．

表 5　NSE の英語をターゲットとして指向する態度

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学前	−	○	−	−	○	−	−	−
留学後	○	○	−	NA	○	NA	NA	○

以下は，留学前のインタビューで英語母語話者圏への留学を希望していた“B”と“E”の引用である．

“B”「もとはフィリピンじゃなくて，もっと他の華やかなところに行きたかったんですけど，値段とかの問題でフィリピンになったので…行ける機会があったら，カナダとかワーキングホリデーでも行けたらって考えを，漠然と持ったりはしてます.」

“E”「（もし同じ値段でカナダやイギリスに留学があったら）僕だったら普通にイギリス行きます…どちらかと言えばそこ（フィリピン）で会話を身につけて，それから海外へ行くっていうようなイメージだと思っていたので….」

このように留学前に英語母語話者圏への留学を希望していた“B”と“E”は，フィリピンでの英語留学後もその態度に変化は見られず，むしろ NSE の英語への指向が強まったことが確認された．特に“B”は留学後のインタビューで「発音がネイティブに近ければ近いほどコミュニケーションが取りや

すくなると思う…元々ネイティブのようになると思っていたので，まずはそこを目指している」とはっきりと述べていた．また留学前に NSE の英語について言及が見られなかった“A”と“H”も，留学後のインタビューでは英語母語話者圏での留学を指向する態度が見られた．“A”は「次にもし留学するとしたら…イギリスとか行きたいんですよ」と言及していたし，“H”も 5 ヶ月間フィリピン人講師から英語を学習した後，その英語がどれだけネイティブに通用するかを知るために，最後の 1 ヶ月間をフィリピン国内にあるオールネイティブの英語学校に通ったとのことであった．

表 6 は，NSE の英語をターゲットモデルとするという明示的な言及はなかったものの，留学中・後のインタビューでフィリピン英語留学を NSE とのコミュニケーション準備として位置づけていた参加者を示したものである．

表 6　フィリピン英語留学を NSE とのコミュニケーション準備と位置づけ

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	○	○	−	NA	○	○	○	○

この表からもわかるように，“C”を除いた全員がフィリピン英語留学を NSE とのコミュニケーションのための準備段階と位置づけていたことがわかる．“F”と“G”は，フィリピン英語留学を，オーストラリアのワーキングホリデーを成功させ，そこでの生活をより実りあるものにするための英語力鍛錬の場として位置づけていた．表 5 と表 6 のインタビューデータから，本研究の参加者のほとんどが多かれ少なかれ, 英語学習の最終ゴールとして，NSEに通じる英語の習得を目指していることがわかった．

表 7 は，NSE の英語をターゲットとする傾向がある一方で，NSE の英語が理解できなかった経験を語った参加者を示すものである. 参加者全員が NSE の話す英語を難しいと捉えていることがわかった．

表 7　NSE の英語が理解できなかった経験を持つ参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	○	○	○	NA	○	○	○	○

以下は，NSE の英語が難しくて理解できなかった経験についての引用である．

“E”「たまたまアメリカ人の女子会みたいなところに居合わせたんですけど…そういうカジュアルトークだと，文法も言い回しも，単語とか種類たくさんあるし，全然聞き取れなかった. 」

“H”「ビジネスをバリバリやっている人は， 普段しゃべるスピードですね…全く聞き取れませんでした. 」

“E”は，アメリカ人の話す英語特有の言い回し（スラングなど）の理解の難しさ，また“H”は，

NSE の英語のスピードの速さという観点から経験を語っており，他の参加者のコメントも多かれ少なかれ同様のものであった．これらのインタビューから，本研究の参加者のほとんどが NSE の英語をモデルとしつつも，理解の難しさからなかなか手の届かない別格のものとして位置づけているような印象を受けた．

3　フィリピン人講師の英語に対する寛容性

本研究では，NNSE であるフィリピン人講師の話す英語に対し，参加者がどのような態度を持つのかということが重要なポイントであり，全ての参加者にフィリピンで話される英語変種についての質問を試みた．変種という専門用語は参加者にはわかりにくいため，インタビューではフィリピン訛りという言葉を使用した．表８は「フィリピン英語の訛りをどう思うか」という質問に対する結果である．

表８　フィリピン英語の訛りに対する不安感を抱かない参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学前	○	○	○	○	△	△	○	○
留学中・後	○	○	○	NA	○	○	○	○

この表が示すように，留学前のインタビューでは２名の参加者がフィリピン英語の訛りに対し多少の不安を示唆していたが，残りの６名は不安感を抱いていなかった．また留学中・後でのインタビューでは，参加者全員が不安はないと言及していた．留学中に実際にフィリピン人講師の授業を受けた後の意見として，参加者全員が強いフィリピン訛りを感じなかったと言及した．街中のフィリピン人の話す英語には強い訛りが感じられたが，フィリピン人講師の英語は，たまに油断するとアクセントが単語の後半についたりするといった程度で，気になるほどの訛りではなかったというのが参加者の大方の意見であった．

その一方で，表９は，自分の英語力がフィリピン訛りのわかるレベルではないと言及していた参加者を示したものである．

表９　フィリピン訛りがわかる英語力のレベルではないと感じている参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	−	○	○	NA	−	○	○	−

フィリピン人講師の英語に強い訛りは感じなかったと述べていた７名中４名が，実際は訛りがあるかどうかわかるレベルに自分の英語力が達していないことを指摘していた．このことは，本研究の参加者が日本の英語教育において様々な英語変種に触れる機会が少なかった可能性を示唆するものでもある．

表 10 は，コミュニケーションが取れれば，英語の訛りは問題ないと感じている参加者を示したもの

である.

表 10　コミュニケーションが取れれば訛りは問題ないと感じている参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	−	○	○	NA	−	○	○	−

以下は，訛りを気にしない理由として，コミュニケーション重視をあげていた参加者“B”と“F”の引用である.

“B”「英語って訛りはあれど，やっぱり英語で，共通する部分は文法なり多々あるじゃないですか．だからフィリピン行ったとしても，そこまで気にならないかなって.」

“F”「英語の感覚はわからないから，それで日本語に置きかえてみたら，日本語をしゃべれない人から見たら，方言でもしゃべれるじゃないですか.」

ここで興味深いことは，留学前と後を通して，ターゲットモデルとして NSE の英語を強く指向していた“B”も，フィリピン英語留学をオーストラリアへの準備段階と位置づけていた“F”も，同様に英語変種に対する寛容的な態度を示していたことである．NSE の英語をターゲットモデルとしつつも，英語を実践的なコミュニケーションツールとして捉え，訛りよりも英語が使えることを重視するメンタリティーを垣間見ることができたことは貴重な発見であった.

4　フィリピン人講師の英語に対する好意的態度

留学中・後でのインタビューでは，その応答のなかでフィリピン人講師の英語に対する好意的な態度を示すコメントや意見が多数見出された．これは，フィリピン人講師の英語変種についての質問に伴って出てきた意見であるが，ELF を考える際に重要な視点を提供するものと考える.

表 11 は，フィリピン人講師の英語のわかり易さについて言及した参加者を示すものだが，なんと有効回答者全員が「フィリピン人講師の英語はわかり易かった」とコメントしていた.

表 11　フィリピン人講師の英語のわかり易さに言及した参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	○	○	○	NA	○	○	○	○

表 12 は，フィリピン人講師の使う英語がわかり易い理由として，具体的にスピードや発音の調整をあげていた参加者である.

表 12　わかり易さがスピードや発音の調整と言及した参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	−	○	○	NA	○	−	−	○

以下は，NSE との比較でフィリピン人講師の英語の聞き取り易さについて述べていた“B”と“E”からの引用である．

“B”「実際に今，ルームメイトの人がカナダ人で，ネイティブの人で，言葉と言葉を連続していうと全く別の発音とかになって，それが聞き取れないんですけど，フィリピン人の場合それがあまりなくて．単語，単語で聞き取りやすかったですね．」

“E”「欧米人と話すと全然違って，フィリピン留学で先生と話すんですけど，先生も日本人に合わせてくれてるんですよ．日本人に聞き取りやすいような発音をしてくれるんですよね．」

“B”は帰国後にシェアハウスで外国人と生活しており，NSE とフィリピン人講師の英語の違いについて，実体験をもとに具体的に描写していた．スピードや発音，さらには単語や構文の調整は，わかり易さを追求するうえで ELF 環境ではとても重要な役割を果たすものなので，今後の研究課題として，より深い考察を試みたい．

表 13 は，フィリピン人講師の教え方の上手さについて言及した参加者を示すものである．

表 13　教え方が上手であることに言及した参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	○	−	○	NA	−	−	○	○

以下の引用も同様に，NSE との比較という観点から，フィリピン人講師の教え方が上手であると指摘したものである．

“C”「文法の授業があるんですけど，凄い詳しい人がいて，大抵のアメリカ人は知らないよね，っていうことを教えてくれますね．」

“G”「ネイティブの先生は英語に慣れすぎちゃって，どこがわからないのかわからないというようなところがあるけど，フィリピンの先生はそういうところがなくて，わからないところがわかるっていう．省略していい関係代名詞と省略してはいけない関係代名詞とか，そういうの．」

“H”「フィリピン人の方が，日本人は何がわからないかというのを汲み取ってくれますので．元々フィリピン人は学校の先生になるべく色々教育を受けてきたと思うんですけど，ネイティブってそういうの，ないんですよね．なので，教え方も微妙っちゃ微妙なんですよ．」

これらのコメントから受ける印象は，NSE は文法指導が上手ではないという意識が背景にあり，それに対し，フィリピン人講師は苦労して英語を学んだ経験から，教え方が上手になったと捉えているように思われる．前述したように“H”は実際にフィリピン国内において，フィリピン人講師の授業と NSE オンリーの英語学校での授業を受けた実体験から，その違いを述べており，説得力のあるものであった．

表 14 は，フィリピン人講師が自分の不完全な英語を理解してくれるとコメントした参加者を示すものであり，表の下に続く引用が，そのコメントをした２名の参加者のものである．

表 14　自分のへたな英語も理解してくれる

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	−	−	○	NA	−	○	−	−

“C”「相手が，こっちの言いたいことを何とか読み取ってくれる」
“F”「先生は理解してくれるんですよ，私のへたくそな英語でも．」

自分の英語に対するフィリピン人講師の理解について言及した参加者はたった２名ではあったが，相手の英語を理解しようとする態度も ELF 環境では大切な要素であると考え，取り上げた．フィリピン人講師がなぜ日本人の英語変種を理解できるのかについても次に探求する研究課題としたい．

Ⅵ　考察

本稿の目的の１つ目「フィリピン英語留学前・留学中・留学後で日本人留学生がどのような言語態度を持っているか」については，上記で述べてきた通りである．２つ目の「フィリピン英語留学を通して言語態度に変容は起こるのか」については，NSE の英語をターゲットモデルとする参加者の態度に変容は見られなかった．またフィリピン人講師の英語に対する寛容的態度も留学前のインタビューで既に現われ，参加者が日本でフィリピン留学を選択した時点から醸成された可能性も否めず，実際の留学体験によって変容が起きたとは言い難い．しかしフィリピン人講師の英語に対する好意的態度，特にその英語のわかり易さについては，留学を通して得られた新たな気づきだったので，若干の態度変容が起こったと言ってもよいかもしれない．３つ目の「言語態度変容における心理的メカニズムはどのようなものなのか」については，NSE の英語をターゲットモデルとしつつも，NNSE であるフィリピン人講師の英語や教え方を高く評価するという，一見矛盾するような態度が見られたが，フィリピン留学の参加者たちは NNSE の英語を，NSE の英語の対立軸として見るのではなく，NSE の英語へ移行する中途段階として位置づけているように思えた．そのように考えると，NSE の英語をターゲットモデルとして維持する態度，留学前から見られた英語変種への寛容性，NNSE の英語に対する好意的態度の芽生えは説

明がつく.

ただし，今回の調査ではNSEの英語をモデルとする態度について深く掘り下げた質問をしたわけではなく,ターゲットモデルとする気持ちが「NSEのように話せたらなあ」という単なる願望なのか「NSEのように話すことを目指す」という強い意志なのかは定かではない．NSEの英語をターゲットモデルとする日本人英語学習者の心理的な部分の探求も今後の課題としたい.

最後に，本研究の参加者は，フィリピン留学の講演会に集まった人たちからランダムに募ったため，英語力，フィリピン留学前の海外経験，年齢，フィリピンでの留学期間などの統制は取れず，質問項目はあるものの,流れに応じて自由に語ってもらう形式のインタビューデータを基にまとめたものなので，本研究の成果を一般化することはできないということを断っておきたい．しかし，質的研究というアプローチを通して様々な課題が浮かび上がったことは本研究の大きな成果であり，そこから得られた示唆を今後の課題として，質的・量的両側面から考察していきたいと考えている.

Ⅶ　おわりに

本研究を始めるにあたり，フィリピン人講師から英語を学ぶ体験を通して「NSEのように話せなくても，相手に通じる英語が使えればいいと思うようになった」とか「NNSE間ではわかり易い英語を話すことが重要だと知った」という明示的な言語態度変容を期待したのだが，残念ながら，そのような結果は得られなかった．しかし，フィリピン人講師の話す英語に対し，寛容的かつ好意的な態度，例えば，若干訛りがあったとしてもコミュニケーションが取れることやわかり易く話すことの大切さに対する小さな気づきを見出せたことは大きな収穫である.

文部科学省は，平成21年3月告示の高等学校学習指導要領で「授業は英語で行うことを基本とする」と明記した．この方針には賛否両論があるものの，日本の英語教師たちに今後英語で授業を行うことが求められるのは確かである．しかし高校の教育現場では,「コミュニケーション英語Ⅰ」という科目における発言の半数以上が日本語であるとする教師が47％と約半数を占め，多くの教師が英語を使って授業できていないのが実情のようである（日本経済新聞，2014）.

日本の教室で英語を使って授業するという状況は，日本語が共通の母語であるとは言え，NNSE間で英語を使用するELF環境と捉えることができる．この状況で生徒たちがNSEの英語をモデルとする意識を持ち続けたら，多くの日本人英語教師は萎縮して教壇で英語を使うことなどできないだろう．文部科学省の方針を具現化するには，教師も生徒も「NSEのように話せなくてもいい．日本語訛りの発音でもかまわない．むしろわかり易い英語を使うことが大事だ」という共通認識を持つことが重要だと考える．英語の教室をELF空間として捉え，教師と生徒の双方がお互いの話す英語に寛容になり，間違ってもいいから英語を使おうという意識改革を進めない限り，文部科学省の方針は机上の空論となってしまうだろう.

本稿では，フィリピン英語留学をNNSE間で行われるELF環境下での英語教育と位置づけ，質的研

究の視点から考察を試みた．そこで行われている英語教育は，ELF という観点から日本の英語教育改善に向けて多くの示唆を与えてくれるものであった．本研究の次のステップとして，フィリピン人講師と日本人留学生のインタラクションに焦点を当て，そこでの英語使用の分析を試みたいと考えている．

付記

本研究は，2013 ～ 2014 年度　相模女子大学特定研究助成費（B）『フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビュー及び参与観察を手掛かりに』の助成を受けた成果の一部である．

謝辞

本研究に際して，本研究の要ともいえるインタビュー調査のための留学予定者リクルートの機会を講演会の場で与えて頂いた太田英基氏, そして快くインタビューに応じてくださった留学生の皆様に対し，感謝の意を表します．また相模女子大学特定研究助成費（B）の共同研究者，渡辺幸倫氏の協力にも感謝したい．

＜付録＞

「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：経時的インタビュー及び参与観察を手掛りに」
留学前アンケート

相模女子大学　羽井佐昭彦・渡辺幸倫

お名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

連絡先：（メールアドレス）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（携帯電話）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご職業：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　年齢：＿＿＿＿＿＿

1．フィリピン留学予定時期：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿～＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2．留学先（語学学校名・地域）：

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．留学の総予算：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4．留学の目的：

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5．今回の留学で伸ばしたい技能の順位

（　　）Listening　（　　）Speaking　（　　）Reading　（　　）Writing

6．フィリピン留学の決め手：

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

7．英語学習経験（留学経験・ホームステイ・英会話学校・学生時代の専門やサークルなど）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

8．現在の英語のレベル（英検・TOEIC など）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力，ありがとうございました.

参考文献

Chiba, R., Matsuura, H. and Yamamoto, A. (1995). Japanese attitude toward English accents. *World Englishes 14*, 77-86.

Haisa, A. and Watanabe, Y. (2014). Language Attitudes of Japanese Learners Who Are Planning to Study English in the Philippines. *The Journal of Sagami Women's University* (*Humanities*), *Vol. 77A, 1-7.*

Hanamoto, H. (2013). How does the experience of exposure to non-native English varieties relate to learners' language attitudes toward EIL?: A mixed quantitative and qualitative study of Japanese students of science and engineering. *Asian English Studies*, *15*, 125-139.

Kachru, B. (1996). Norms, models and identities. *The Language Teacher, 20,* 1-13.

Kobayashi, I. (2008). "They speak 'incorrect' English": Understanding Taiwanese learners' views on L2 varieties of English. *Philippine Journal of Linguistics, 39,* 81-98.

Matsuda, A. (2002). Representation of users and uses of English in beginning Japanese EFL textbooks. *JALT Journal 24* (*2*), 182-200.

――― (2003). The ownership of English in Japanese secondary schools. *World Englishes, 22* (*4*), 483-496.

Matsuura, H., Chiba, R., and Yamamoto, A. (1994). Japanese college students' attitudes towards non-native varieties of English. In D. Graddol and J. Swann (Eds.), *Evaluating language* (pp.52-61). Clevedon: Multilingual Matters.

Takagaki, T. (2008). Teaching English as an international language and senior high school English textbooks in Japan. *Asian English Studies, 10*, 83-97.

Yamanaka, N. (2006). An evaluation of English textbooks in Japan from the viewpoint of nations in the Inner, Outer, Expanding circles. *JALT Journal, 28* (*1*), 57-76.

日本経済新聞．2014 年 6 月 19 日の記事．*日本経済新聞社*.

文部科学省（2009）.「高等学校学習指導要領」*東山書房*.

文部科学省（2010）.「高等学校学習指導要領解説：外国語編，英語編」*開隆堂出版*.

渡辺幸倫・羽井佐昭彦（2014）.「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビューを手掛かりに」*相模女子大学文化研究*（*32*），47-66.